1. 製品説明

「ザルトラップ点滴静注」

ザルトラップ（アフリベルセプト　ベータ）は VEGF 阻害剤に分類され、VEGF ファミリーである（VEGF)-A, B、胎盤増殖因子（PIGF）に結合する特徴がある。ザルトラップは VEGFR にリガンドが結合することを阻害することにより、抗腫瘍効果を示す。

適応は、切除不能な進行・再発の結腸・直腸癌で FOLFIRI 療法との併用でオキサリプラチンベースの治療の 2 次治療として効果が確認されている。

2. ミニレクチャー

「転移性骨腫瘍の診断と治療」　　新谷整形外科部長

近年、がん治療の進歩により、がん患者の生存期間が延長し、その結果として骨転移を有する患者も増加している。骨転移は、病的骨折や脊髄麻痺を生じ、患者の ADL を下げる大きな要因となる場合がある。骨転移を生じやすいがん種としては、前立腺、乳腺、肺、腎、甲状腺などがある。また、症状がないものを含めるとがん患者の約50％に骨転移があり、10％には症状があり、治療の対象となる。

骨転移病変の検索には、PET、骨シンチ、MRI などが有用であり、症状が現れる前の早めのスクリーニングが重要である。治療は診断後、リスク評価を行い、手術適応であるか、保存的治療を行うかが決められる。保存的治療に用いられる薬剤には、ビスホスホネート製剤、抗 RANKL 抗体薬、ホルモン療法、放射線、抗がん剤治療などがある。その他には、ラジオ波や温熱療法が用いられる。手術は予後 6 か月以上の場合に適応となり、腫瘍切除又は姑息的手術が行われる。骨転移の治療は整形外科医のみならず、IVR 科、患者の主科、放射線科、緩和科との協働が必要である。

3. 地域がん登録の入力状況について

4. 症例検討

「直腸神経内分泌腫瘍」　消化器・肝臓内科　青野医師

患者は 67 歳男性、近医より、大腸多発ポリープで紹介された。既往歴、検査データなどは特に問題なかった。大腸カメラで直腸に直径12mmの白色のポリープが認められた。病理結果は、CD56 陽性、クロモグラニン A 陽性より、NET G1 と診断された。当院では切除出来ないため、天理よろづ病院へ紹介となった。

NET は、これまで、カルチノイドと呼ばれていた疾患で、神経内分泌細胞へ分化する細胞から生じる。消化管や肺、気管支に生じるが、最も頻度が高いのは消化管である。病期は G1、G2、G3 に分類され、G3 は悪性であり、NEC と診断される。NEC の予後は不良で、6 か月以内に34％の患者が亡くなり、1 年生存率は10～15％である。内視鏡では、類円形、粘膜下腫瘍隆起が特徴である。治療は根治手術が有効であり、化学療法にはコンセンサスがないのが現状である。

5. その他

・次回開催予定日：平成29年9月1日（金）15 時より

次回は、放射線科、田中医師によるミニレクチャーと腫瘍内科、岩田医師からの症例検討を予定しています。